

論文の内容の要旨

氏名：徳 永 夏 子

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

論文題名：日本近代文学における女性主体の構築と可変性——『青鞥』をめぐる——

本研究は、『青鞥』（明治四四年九月～大正五年二月）を中心に、明治四〇年代から大正末までの日本において、女性の文学的表現がどのように編成されてきたかを論究したものである。この時期、文学は芸術の一つとして価値を持ち始めるが、その中心は男性の手に委ねられていた。その中で『青鞥』は、女性自身が表現活動の場を開き、非対称なジェンダー構造に抵抗したとして、フェミニズム文学批評によって高く評価されてきた。だがそれらは、文学的達成として〈近代的自我〉を探求する〈主体的〉な女性の姿を重視したがゆえに、平塚らいてうや伊藤野枝らの功績を炙り出した一方で、論者の規定する価値基準にそぐわない女性作家やテキストを等閑に付した。

本研究では、このような批評から離れ、個人の資質に還元されがちだった『青鞥』の特色を、構造の問題として再検討した。女子教育や、〈新しい女〉を扱った演劇をめぐる言説、一般的な婦人雑誌に掲載された美容やファッションに関する記事など、対象領域を広くとり、それらの錯綜した言説状況と『青鞥』の関わりを分析した。『青鞥』についても、あまり注目されてこなかった第五巻以降の無名の書き手たちのテキストを取り上げた。

また、従来の批評は、女性の性的差異を根拠に、その主体性を主張したため、ともすれば二項対立的なカテゴリーの固定化を補強する可能性があった。本研究では、その矛盾を指摘し、規範の枠組み自体を問う立場からテキストの分析を行い、ジェンダー構造の可変性を明らかにした。

さらに、『青鞥』の文学的特徴を析出し、他領域の研究との接点を探り、フェミニズム文学研究が企図してきた男性中心の文学史の書き直しを別の角度から目指した。以下、各章の具体的な内容を記す。

第一章「閨秀文学会の源流としての〈穏健な女子教育〉—『新天地』におけるイブセン受容の両義性—」では、『青鞥』の起源としての閨秀文学会を取り上げた。閨秀文学会は、ユニヴァサリスト教会付属の成美高等女学校で、生田長江や与謝野晶子、森田草平などの講師が、平塚らいてうや山川菊栄らにむけて文学や思想を教授した講習会であるが、その内実は明らかではない。第一章では、教会の牧師赤司繁太郎が発行した『新天地』（明治四一年一〇月～四二年一月）という雑誌に注目し、ヘンリック・イブセンに関する記事を分析した。

イブセンは、『人形の家』で女性解放思想を示したことで有名である。ここでは、そのような当時にあっては過激とも言える思想が、穏健な女子教育を旨とした成美女学校で、どのようにして可能となったかを跡づけた。イブセンには、社会改革家という別の側面があり、ユニヴァサリスト教会は、その面から啓蒙活動に用いていた。そのため、閨秀文学会の受講者たちは、公然とイブセンについて学ぶことができたのである。イブセンの受容の両義的な側面が、女性たちに、新思想へ触れる機会をもたらしたと結論づけた。

第二章「文芸協会『人形の家』における〈しおらしさ〉の演出—協力者ケート夫人に触れて—」では、主人公ノラという〈新しい女〉が、文芸協会による上演（明治四四年九月二二日～二四日、十一月二八日～一二月四日）に際してどのように造形されたのかを考察した。特に、上記ユニヴァサリスト教会に所属したアメリカ人女性 Ella Stimson Cate（ケート夫人）に注目した。ケート夫人の存在はこれまで殆んど触れられることがなかったが、衣装の考案だけでなく、文芸協会でのノラを演じた松井須磨子の演技指導も行っていた。

実は、松井須磨子のノラは、『人形の家』が女性の自覚を提起していたにもかかわらず、それとは対照的な「しをらしい」娘として観客に受け取られていた。文芸協会がそうした演出を行った背景には、〈新しい女〉を歓迎する男性たちが、ノラの葛藤を、旧世代と対立する自分達の問題としてのみ捉え、現実の女性の自立との関連を認めなかった、というねじれた状況があった。そして、「しをらしい」という印象には、ケート夫人が考案した衣装が大きく影響していた。しかしながら、前述のねじれた状況は、ケート夫人をめぐる批判的な言説も招いた。ケート夫人は文芸協会の活動に協力的だったにもかかわらず、西洋の芸術を教える〈女性〉であったことで、バッシングをうけたのである。

第一章と第二章では、〈新しい女〉の誕生の根底に、それを強固に抑圧する穏健な女性観があったことがわかった。第三章「〈穏健な女子教育〉の行方—『婦人画報』における修養の努力—」では、この〈穏健な女性〉という規範の問題に焦点を当て、明治三〇年代から本格化する日本の女子教育の理念が、女性たちの表現の機会をどのように奪っていったかを考察した。『婦人画報』（明治三八年七月～）の読者たちは、メイクやファッションを工夫することで、グラビアページの令嬢や夫人のような〈美人〉になることを目指した。それは、女性の自主的な欲望だと語られ、自己実現の手段ともみえるが、誌面の分析により、その作為性を明らかにした。

こうした外面的な装いの問題は、ケート夫人の衣装の工夫や、『青鞥』同人の反抗的で突飛な装いが、観念的な自覚を支えていたことと一面でつながっている。ただし、本研究では、らいてうなど、反抗の拠点と目される人物を中心には扱わない。それは彼女が、規範に反抗した〈新しい女〉を主張するために、むしろ〈規範的な女〉というカテゴリーを強固に打ち出しており、そのため、反抗の表明は、男／女、抑圧／被抑圧、中心／周縁といった二項対立をその力学とともに温存してしまう危険をはらむからである。

第四章「素木しづ「三十三の死」における主体の錯綜—揺らぐジェンダー・アイデンティティ—」では、こうした二項対立自体を相対化する試みを検討する。小説「三十三の死」（『新小説』大正三年五月）は、突如障害を負って絶望を感じた主人公が、逆説的に自分の生を自己決定し、前向きな女性の生き方を示したとして評価されてきた。だがテキストは、規範の確認と逸脱の間で揺れ続けている。障害によってあきらめざるを得ない美しい装いは、前章で見た通り女性を縛る規範であるだけでなく、アイデンティティの抛り所でもあるからである。

しかし、装いによる主体化の失敗をくりかえす中で、装いで得ようとしていた女らしさの自明性に対する疑念が生じる。〈女らしさ〉とは、所与のカテゴリーではなく、社会的な言説やイデオロギーによって構築されたものであるため、アイデンティティの源泉にはならないからである。ここには、男／女というカテゴリー自体を問う視点を読むことができる。

同様に、第五章と第六章では、従来の女性文学の構図を捉え返す立場から、女性の主体化の実践とされてきた〈自己語り〉の問題を、第五巻以降の『青鞥』のテキストを中心に再検討した。

第五章「『青鞥』における自己語りの変容—テキストによる現実との接触—」では、〈自己語り〉が〈他者〉の表象につながった点に注目した。当初らいてうらは、女性の生き方を議論し、自分の意見を相手へ正確に伝えることを重視した。そのため、『青鞥』には、相手に向けて自己を語ることを強く意識したテキストが多く掲載された。第五巻以降のテキストでは、これらを引き継ぎつつ、読み手へ向けて自己を物語ることで、他者を通して構成された、客体化した〈私〉の表象へとつながり、三人称の主語を立てることに発展した。これは、自分とは考えや立場の異なる〈他者〉も、作中人物へと形象化させることになった。

本研究で注目したのは、それが単なる虚構としての作中人物ではなく、現実の自分に根差した〈他者〉の表象として、積極的に捉えられるという点である。これらは、完成された形とは呼べないものも多いが、らいてうに代表される強い主張が、女性たちの状況を一絡げに括って、代表＝代弁してしまった暴力性を考えた時、〈他者〉との交渉の一つのあり方として重要な意味をもつ。

第六章「『真実の心』で書く—『青鞥』における真実の表象とジャンル認識の交錯—」では、『青鞥』の〈自己語り〉を叙法の側面に注目して論じた。特に、書き方の規範が、ジャンルの境界線の画定や、コミュニケーションの問題とどのように関係しているかを明らかにした。第三巻ごろ、らいてうや伊藤野枝は、特定の仲間に自分の立場や意見を正確に伝えるため、テキストの〈事実性〉を重視した。その際、現在から過去を見通すパースペクティブを排除し、その時々々の〈事実〉に即した自己を書こうとした。それを〈小説以外のジャンル〉と名指し、虚構の〈小説〉と差別化した。〈事実性〉を重視する規範が、ジャンルの境界線を引いたといえる。第五巻以降は、この規範が変化することで、ジャンルの規定も変動する。新たな規範を、山の井みね子「淋しき心」（五巻四号、大正四年四月）や濱野雪「真実の心より」（五巻七号、大正四年七月）などの分析を通して明らかにした。

彼女たちの整合性や構築性の低い叙述は、メッセージの内容より、自分の真摯な姿勢を示そうとしたために生じた軋みであった。真摯な自己の姿勢を表象するという規範は、複数のジャンルにまたがるものであり、第五巻以降は、それを記述する形式の違いによってジャンルを分けるようになったといえる。さらに、テキストを介した関係性という面から考えてみると、第三巻ごろでは、内容伝達を目的とした限定的なコミュニケーションであったが、第五巻以降では、広範な読者へむけた開かれた状態に変わっている。それらを『青鞥』の文学表現の一つの特性として指摘し、『青鞥』の研究を外側に開いていく実践の一端と位置付けた。